Ⅴ 令和7年度(2025 年) 受賞実績

※ 受賞者の所属、職名は、受賞当時のものです。

■ 一般社団法人 日本森林技術協会　第 70 回森林技術賞（令和７年(2025 年) 6 月）

受 賞 者：雲野　　明（森林研究本部 林業試験場 保護種苗部 保護グループ 研究主幹）

受賞内容：クマゲラを中心とした森林の生物多様性保全に係る基礎的技術の開発とその普及

北海道の森林を代表する鳥であるクマゲラにスポットを当て、生息確認方法や冬期の重要な採餌木を明らかにし、クマゲラの生息に配慮した森林管理を進める上で重要な基礎技術や情報を提供したほか、キツツキの樹洞木の特徴や伐採地に保持した樹洞木の役割を解明した。さらには世界的にも評価の高い大規模保持林業実証実験に参加して鳥類の保全効果を明らかにするなど、森林管理とつながりの深い研究を進めている。

生物多様性保全への関心が世界的に高まる中で、これらの研究成果は重要な知見として森林管理の現場で活用されており、このたび森林管理技術の向上への多大な貢献が認められ受賞となった。

■ 一般社団法人 日本森林学会　2026 年度 Journal of Forest Research 論文賞

（令和７年(2025 年)12 月）

受 賞 者：角田　悠生（森林研究本部 林業試験場 森林経営部 経営グループ 研究職員）
大野　泰之（森林研究本部 林業試験場 森林経営部 部長）
滝谷　美香（森林研究本部 林業試験場 森林経営部 経営グループ 研究主幹）
津田　高明（森林研究本部 林業試験場 森林経営部 経営グループ 主査）

受賞内容：Importance of pre-release height of saplings in governing mortality factors after canopy opening: insights from 21-year monitoring of *Abies sachalinensis* saplings

（林冠部開放前における稚樹の樹高が開放後の稚樹の生死を支配する：トドマツの更新過程を 21 年間モニタリングして得られた洞察）

本論文賞は、日本森林学会が発行する国際学術誌「Journal of Forest Research」に掲載された論文の中から、森林科学の学術的な発展に貢献する独創的で国際的に優れた論文に贈られるもの。

受賞論文は、常緑針葉樹であるトドマツを対象に、21 年間にわたり個体識別を維持しながら 1,100 本以上の樹高と生死を追跡し、林冠開放が稚樹の死亡率と成長動態に及ぼす影響を解明したものである。林冠開放の長期的効果を解析することで、ギャップ形成後の更新過程に関する重要な知見を提示し、樹木の個体群動態を規定する要因間の相互作用についての理解を深めたことを紹介している。

https://doi.org/10.1080/13416979.2024.2314833

■　全国林業試験研究機関協議会　第 38 回研究功績賞第３回全国林業試験研究機関協議会研究支援功労賞（令和８年(2026 年) １月）

受 賞 者：明石　信廣（森林研究本部 林業試験場 保護種苗部長）

受賞内容：エゾシカによる森林被害の把握手法に関する研究

受賞者は、シカが森林に及ぼす影響に関する知見がまだ限られていた時期からこの問題に取り組み、生態的知見を基礎としつつ多様な関係者が活用しやすいシカによる影響把握の新たな手法を開発してきた。受賞者の研究成果は、国際誌を含む学術論文や雑誌等で広く公開され、道内ではシカによる影響把握のみならず被害対策等でも活用されるなど多くの関係者が参考にしている。

また、学会で他の研究者とともに研究集会の開催や、鳥獣害に関する専門家として森林資源調査や担い手育成等の国の各委員会に参画するなど、全国各地でこの分野に広く関わっている。

こうした日本の森林・林業に関する研究で顕著な業績を有していると認められ受賞となった。